



第59回日本アレルギー学会秋季学術大会
教育 (テクニカル) **セミナー18**
T e c h n i c a l S e m i n a r

日時

2009年10月31日(土) 12:05~12:55

会場

第5会場 「飛翔V」

秋田ビューホテル 4F
JR秋田駅西口より徒歩3分

演題

特異的IgEの陽性率

検査室から見たI型アレルギーの疫学と過去10年のトレンド

司会

NPO日本健康増進支援機構 理事長

榎本 雅夫 先生

演者

昭和大学横浜市北部病院 臨床検査科 准教授

木村 聡 先生

共催

第59回日本アレルギー学会秋季学術大会
三菱化学メディエンス株式会社

第59回日本アレルギー学会秋季学術大会 教育 (テクニカル) セミナー18

T e c h n i c a l S e m i n a r

特異的 IgE の陽性率 ～検査室から見た I 型アレルギーの疫学と過去 10 年のトレンド～

現在、保険診療で測定できる特異的 IgE は、およそ 200 項目あります。この中から、患者さんの病歴、年齢、地域性、さらには季節も加味して抗原を選ぶのですが、患者さんが増えている昨今、いつもの「あの抗原」だけで済むとはかぎりません。何を手がかりにしたらよいのでしょうか？

スギや卵白など、有名なアレルゲンでは、大量の疫学データが集積されています。しかし、あまり馴染みの無い項目では、陽性率がどのくらいか分からず、つい手を引っ込めてしまわれるのではないのでしょうか。その結果、先生は「アレルゲン特定の貴重な機会」を逃しておられるかも知れません。

検査室では、あらゆる診療科から検体が集まります。全国規模の大手センターともなると、その数は膨大で、年間 100 万件を超えます。そこで私たちは、これら検体の陽性率を web でお知らせするサービスを国内で最初に開始し 10 年余りが経過しました (<http://www.medience.co.jp/allergy/>)。今回は、そのデータ的一端をお示しします。検査室での集計は、検体の臨床的背景が充分明らかではありません。したがって、解釈には慎重な姿勢が望まれますが、めったに陽性が出ない項目や、1 施設では検体数が限られている項目では、ある程度参考になるように思われます。

本セミナーでは吸入系、食餌系に分け、以下の集計結果を中心にお話します。

- (1) 陽性率が高い項目、低い項目は何か？
- (2) 年齢、地域、季節で陽性率はどう変わるか？
- (3) 依頼件数は少なくても、陽性率が意外と高い「ダークホース」はどれ？
- (4) スギ陽性者は他にどんな抗原に感作されているか？
- (5) 総 IgE は上がってないのに、特異的 IgE が高い検体はどのくらい存在するか？
- (6) 陽性者の数に性差はあるか？

これらについて、過去 10 年あまりの集計結果から、トレンドを見て行きます。お示しする数値は、一般人口における陽性率とは言えませんが、本格的な疫学調査や、日々診療に当たられる先生方に参考になればと思います。

アレルギー検査の集計情報サイト

- 対象
三菱化学メディエンス社で受託したアレルゲン特異的 IgE 検体
- 集計データ数
1998 年 1 月～2008 年 12 月 検査実施分約 1200 万テスト
※同社の受託検体数は年間 100 万件を超える。



<http://www.medience.co.jp/allergy/>